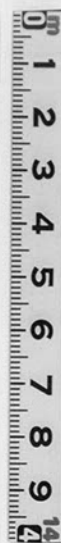


DECEMBER

路 傍 詩

10



DECEMBER

路 傍 詩

10

詩二章

高瀬勝男

ぐつたり疲れて月を擦る
豚奴
柘榴

黄ばんだ淫蠢
林檎
支那竹のさいを持って
壺をふくらませば
ふつくら ふつくら
お月様が出た

風邪氣ある風景

松村清

かしやかしやにのぼせた
鼻口で吸ふ
太陽の赤あさがねばつこい

うつぶしたまま
陽ぼこりくさい野つばらに
鼻おつつけて
地ねずみのやうにそらを
のぞけば
そそくさと商賣にゆく
風がある

旋廻してゐる

中野勇雄

鏡に向へば
GW~~~~~俺の顔が
ひしやげて了う

俺はぐらぐらして俺の顔の
崩れこけて行くのを見る
そこで
俺は鏡を粉碎して
ゆつたりと空を見る
俺は煙草を喫ひはじめる

高橋久由

こどもと

おんぶしてあるく
おんぶしてかけろ

おれは靴がなる
うれしさでいつばいだ

秋空

石川武夫

雲と雲との間隔に
爆音をまぎらされた飛行機！

鶯

猪狩満直

重たい雪雲
だんだん垂れて垂れて
オレの頭を押しつける午後
鶯——飛び立つた
飛び立つた
飛び立つた
切れそうな羽音だ

北

三野混沌

北
諸君は北を向いてゐる
すつきり明るい

複雑な風景

大浦弘四郎

なんにもない
なんにもない
なんにもない
空に木が立つてゐる
おどろくほど細かに木が動
いてゐる
葉の末まで動いてゐる

冬月

松本純一

うたはぬ掌よ
底光りする貝殻に身を
よせて
暗い磯つばをめぐりまわる
湧く——
びつしより濡れて碎かれた
影 あふれてくる

眠れる谷

無数の群集は深く静かだ
おれは耳だけになつてみろ
すまされた複雑なあの呼吸
ジクリ
山上の胸毛がおもく飛雲を
呼んだ

編輯后記

◇曲線の相対的感情は直線のそれよりも象美的科學に於て綜合体である

伸長する直線の官能が非物質的なるものに傾き曲線の情緒主義はいつも要素的なものである音楽が音響を數的概念の元に取扱つていくことは取りも直さず曲線の持つ要素的構造である美學的に説明された素、音はいつも曲線の説話價值に依つて集團的意識を援助する（高瀬）

◇みのりゆく冬眠、第拾輯、遂に路傍を記述す 次輯は豊かな第一誕生をむかへて一つの新しいプランを確立する刮目して餘りあるものにちがいない「香車」「オンパロ」「乾杯群」皆んな元氣だとして平を遺憾なくブラボオカする このさき理想を最もよく具体化する演劇に「路傍詩」のリアリゼーションを放射し俺たちの地上を克明しよう

次輯から一般寄稿を仰ぐ 心しい作品を見せて欲しい
が紀元二千五百八十六年よ（松 本）

大正十五年十二月二十日發行
編輯兼發行人 高瀬勝男松本純一
印刷所 福島縣平町丸山印刷所
發行所 路傍詩社

